



- 03... スポーツ科学で国際競技力向上を支援  
(独)日本スポーツ振興センター・国立スポーツ科学センター・統括研究部長 川原 貴氏
- 06... 多くがポジティブに記述、牛乳乳製品の社会評価は定着  
平成23年度・Jミルク調査より
- 08... 牛乳乳製品を食育学習の教材に、栄養教諭の実践研修  
牛乳食育研修会の開催報告
- 10... 生活者、栄養士それぞれの課題を検証し、情報発信ツールの開発へ  
第1回栄養士向け情報開発研究会を開催
- 11... 各地で栄養士向けセミナーを開催(大阪府、新潟県、北海道)
- 11... 医師向けランチョンセミナーを開催(東京都)
- 12... Jミルクの活動:6~9月の主な活動報告
- 15... 「牛乳乳製品に関する食生活動向調査」を開始  
Jミルク調査活動
- 16... 機能性を重視してホームページを改訂  
ホームページをリニューアル
- 17... 超円高でも止まらない原油や飼料価格の高騰
- 18... 危惧される米国中西部の干ばつと穀物高騰
- 19... 「乳の社会文化価値」に係る学術研究の委託研究者が決定
- 19... 今後のスケジュール
- 19... 編集後記

## 乳の学術連合の窓



乳の学術連合の会員の先生方に、ご登場いただくコーナーです。

## スポーツ科学で 国際競技力向上を支援

初回の「学術連合の窓」には、国立スポーツ科学センター統括研究部長の川原貴先生にご登場いただいた。先生は、牛乳乳製品健康科学会議の幹事で、生活習慣病予防部門の委員をされている。先のロンドンオリンピックでは日本は過去最多38個のメダルを獲得。その好成績に国立スポーツ科学センター(JISS)の存在が大きく寄与したといわれる。センターの役割やアスリートのサポート体制についてお話しいただいた。



川原 貴氏  
独立行政法人日本スポーツ振興センター  
国立スポーツ科学センター・統括研究部長

### トレーニング施設と研究施設が一体となった支援

——ロンドンオリンピックでは金メダルは少なかったが、獲得メダル総数は最高だった。当センターの役割や影響について伺います。  
川原：国立スポーツ科学センターがオープンしたのは2001年ですが、毎年の世界選手権のメダルをオリンピックに見立てて評価すると、センターができてからメダル総数はグッと上がってきている。メダル総数は比較的安定していて、金メダルは本当にわずかな差で勝敗が出るので予測は当たらない。野球のペナントレースの順位が、プロが予測しても外れるのと一緒です(笑)。予測できないところが面白いところで、皆ワクワクドキドキするわけです。今回実力どおりいけば10個は取っておかしくなかった。取れる可能性のある人が皆取オリンピック等のメダルの推移

	金	銀	銅	総数	メダルランク
00年 シドニー	5	8	5	18	15
01年 世界選手権等	5	6	9	20	
02年 世界選手権等	8	6	10	24	
03年 世界選手権等	12	7	11	30	
04年 アテネ	16	9	12	37	5
05年 世界選手権等	6	13	14	33	14
06年 世界選手権等	8	16	11	35	10
07年 世界選手権等	5	7	20	32	15
08年 北京	9	6	10	25	8
09年 世界選手権等	7	5	12	24	10
10年 世界選手権等	18	5	20	43	7
11年 世界選手権等	12	10	13	35	8
12年 ロンドン	7	14	17	38	11

れば15~18個の可能性はあった。悪ければ数個もあり得るという幅の中にあるんです。2008年の北京オリンピックでは金メダルは9個だがメダル総数は25個と落ち込んでいる。シドニー、アテネ、北京と同じような人たちがメダリストで、新しい人が育っていなかった。ドイツのデータによると、3分の1くらい新人が入っていないと、次は落ち込むといえます。当センターができて、ここはトップアスリートしか対象にしていない。競技団体もジュニアまで育成する余裕はなかった。

——今回はその反省で、ジュニアの育成にも力が入るように？  
川原：トップのデータを活用したり、一緒にここで練習していますから、多分ジュニアの育成も徐々に効果が出てきている。ナショナルトレーニングセンターができたのが2008年。北京の前はまだなかった。その要素もあるかもしれない。外国はみんなトレーニングセンターがあって、なおかつ地域にもトレーニング拠点がある。そこでジュニアを育成している。日本にはそのシステムができていない。その割には頑張っている。ハードや仕組みができていないのになぜこんなに頑張っているかということ、企業や学校が支えていたわけです。学校体育は世界的にみてもよくやっている。中国はオリンピックのためにスポーツをしている。子供たち皆のスポーツはぜんぜんやってきていない。日本はそこはよくやっていて、部活に半分くらいの子供が参加している。ところが世界で戦うといった場合、話は別です。世界と戦うには拠点を据えないとだめだし、ジュニアの育成ができていないとこれ以上は難しいと思います。

——選抜された選手は基本的にはここを拠点としてトレーニングを？

川原：それは少数派です。所属チームがあるので普段はそこで練習する。ナショナルチームの合宿がある時にここに来る。当センターの役割は、日本オリンピック委員会・競技団体・大学・国内外のスポーツ研究機関と連携し、日本の国際競技力向上への支援を行うことです。そのため6つの事業を行っています(図1)。トレーニングだけだったら全国どこでもできる。ここはクリニックがあり、リハビリ機能があり、栄養士がいて栄養相談ができ、レストランもあり、トレーニング施設があって専門の指導員がいる。さらに情報技術者がいて、パソコンのネットワーク環境を整備したり、映像の技術者は映像をデータベース化している。そういったITのシステム開発をする人もいます。クリニックで言うと、内科、整形外科、リハビリテーションはフルタイムの職員がいます。それ以外に歯科が週4回外から来ます。他に眼科、耳鼻科、皮膚科、婦人科、心療内科、心理カウンセリングと栄養カウ

図1：事業紹介

スポーツ医・ 科学支援 事業	スポーツ医・ 科学研究 事業	スポーツ 診療事業	スポーツ 情報事業
アスリート チェック医・ 科学サポート	トレーニング・ コーチング方法 評価方法戦略・ 戦術分析	内科・整形外科・ 歯科・眼科・皮膚科・ 耳鼻科・婦人科 アスレチックリハ ビリテーション 心理カウンセリング 栄養相談	ネットワーク プログラム インテリジェンス プログラム
アカデミー支援事業		サービス事業	

ンセリングがある。MRIが2台、CTが1台、超音波、高酸素治療機とか、かなりの機器がある。特に威力を発揮しているのがMRI。一般の医療レベルでは運動しなければ自然と治るといった痛みやケガでも、スポーツ選手はそういうわけにはいかないので、すぐMRIで調べる。病院だと予約して、診てもらって、結果が出るまで2~3週間かかってしまう。ここではすぐ出ます。肉ばなれなどは治癒経過のデータがあってフォローできる。スポーツ選手にとって大事なデータがすぐとれる。トレーニング施設と研究施設が一体となって、競技ごとにいま何が課題で、それを解決するためにはどうしたらいいか、チームをつくってやっています。

### 栄養サポートも重要な役割

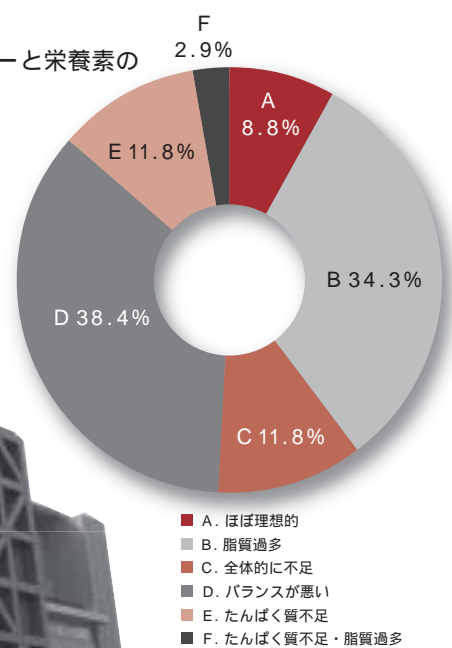
——スポーツ界で栄養管理の重要性が認識されたのはいつ頃からでしょう。

川原：「オリンピック強化指定選手」の栄養調査結果という1987年のデータがありますが、その中の「エネルギーと栄養素の摂取パターン」(図2)を見る限りかなり問題がある。それ以降でしょうね。

——栄養管理の中で牛乳乳製品の位置付けは？

川原：日本人の足りなくなりやすいのは野菜と乳製品です。バランスが崩れているのは、乳製品を摂るかどうかでずいぶん違う。摂っていればバランスがよくなる。牛乳は大事だと思いますね。スポーツ選手の基本的な食事の形として、主食、

図2：エネルギーと栄養素の  
摂取パターン  
(各パターンの割合)



主菜、副菜、牛乳乳製品、果物とあります。メディカルチェックをする時に一緒に、食事はこうしたいとフィードバックしているのと、定期的に選手向けの講習会をしていますから、強化選手はそれを受けられるし、希望すれば個人指導もする。減量や増量、一日中試合がある時の途中のエネルギーの摂り方とか、種目に応じた問題もありますから。

ロンドンオリンピックで劇場を1棟借り切ったマルチサポート・ハウスでは、厨房を改修してここと同じ食事を出せるようにした。それが一番評判がよかった。選手村の食事はすぐ飽きる。するとハンバーガーとか偏ってしまう。リハビリ・コンディショニングホール、トレーニングルーム、心理・コンセンストレーションルームなどもあり、分析室にはテレビが何台もあってどの競技もリアルタイムで見られ、対象競技はそこから収録してゲームを分析してコーチに届けたりしました。

### 永年、日本選手の診療、健康管理に携わる

——先生の当センターでの仕事をご紹介ください。

川原：今は管理職として医学のマネジメントと全体のマネジメント、情報技術者の取りまとめをえています。センターができた時、内科医は私一人しかいなかった。メディカルチェックを年間2000人くらいした。内科の診療、医学部長をやっていたので大変だった。なおかつ体協、JOCの委員もやっていたから、対外的に文科省に説明に行ったり、本部へ行ったり、JOC競技団体と話したり。去年までは医学部長、情報部長、統括研究部長と3つやっていた。1976年に医学部を卒業して、1977年にユニバーシアード大会に選手団の本部ドクターで行き、それ以来シドニーオリンピックまで13回日本代表のドクターを務めた。そういう関係で日本選手の診療や健康管理に永年携わってきた。現在は選手団全体という10数名のドクター、30人くらいのトレーナー、なお村外にはパーソナルトレーナーが来ていて、すごい数のメディカルスタッフがいきますけど、私が行き始めた時は世の中にスポーツ医学はあまり認識されていなかった。舞台がぜんぜん違うのでわけがわからず、教科書にも出ていない。どうし



交代浴・炭酸泉



畳スペース



リハビリ・コンディショニングホール

たらいいんだと(笑)。記録が落ちてくると多くはトレーニングのやり方とか、コンディション、栄養に問題があったりということが多く。そこを指導しないとイケない。その辺が普通の医学と違いますね。

### ジュニア層の育成にトップアスリートのデータ活用も

——これからのスポーツももっと科学しなければいけないと感じた。科学しているところが伸びている。今後について感じられることは。

川原：まだ活用の余地が多くあるので活用してほしい。そのためには強化戦略がしっかりしていないと。センターだけが一生懸命になってもダメ、連携が重要です。競技団体も計画を持って活用してほしい。今後は育成をどうするか、そこに当センターがどうかかわっていくか。ジュニア期から栄養や体のケア、トレーニングのチェックや目標設定をしてあげるとか。センターができた時はトップアスリートに集中するということでしたが、それだけではこの国の本当のスポーツの力にならない。継続していい成績を維持するには裾野がないと。まずはセンターが持っているトップ選手のデータをいかに活かせるような形にして提供するかということですね。

川原 貴 氏  
国立スポーツ科学センター統括研究部長。1976年東大医学部卒業、79年東大第2内科入局。東大教養学部講師、東大大学院総合文化研究科助教授を経て、2001年国立スポーツ科学センターへ。



interview



聞き手：高見裕博  
(社)日本酪農乳業協会 理事

書籍における「牛乳関連記述に関する調査」を実施

# 多くがポジティブに記述、牛乳乳製品の社会評価は定着

一方、エビデンス根拠のないネガティブ記述書籍の悪影響も



## 調査の意図

現代社会においては、インターネットの普及や電子書籍化によって、人々の知識習得や意識形成における書籍などの活字媒体の役割が低下しているといった状況がある。

しかしその一方で、例えば「ママ友」ネットワークや職場、地域における多様なソーシャル・ネットワークの中で、周辺の生活者に影響を与えている「関心や意識の高い人々」の場合は、一般の生活者に比べて情報や知識の獲得に対しコストや時間を費やすことに抵抗が薄く、書籍からも多くの情報を得ているといった調査結果がある。

そうしたことから、市販されている書籍において「牛乳乳製品」の栄養や健康に係る機能が、どのように評価をされているかについて調査を行うことを通して、日本社会における「牛乳乳製品」の栄養健康機能の認知構造の解明を期した。

## 調査の方法（概要）

### (1) 分析対象書籍の選定

本調査は、普及度が高い市販の書籍において、「牛乳乳製品」の栄養健康機能が、どのような評価をされ、どのように扱われて（記述されて）いるのかを分析した。書籍の選定については、大手書店の売り上げデータベースを活用した。まず「牛乳」、「栄養」、「食育」がタイトルにある約1000冊の書籍をリスト化し、その中から牛乳等の記述が見込まれる「売り上げ上位の本」を100冊選定した。選定した売り上げ上位書籍から研究者向け書籍、教科書、歴史書、牛乳に関する記述がなかった書籍を除外し、最終的に88冊を分析対象書籍とした。

### (2) 記述内容のテキストマイニング

書籍記述の抽出と分析は、以下の手順で行った。牛乳乳製品に係る記述箇所を網羅的に抽出。抽出した記述箇所を「記述の対象（主語）」、「記述の方向（主旨）」、「記述の展開（補足）」で整理し、テキストデータ化。「記述の対象（主語）」を牛乳乳製品、牛乳、乳製品、栄養（成分）、効能、病気、食育、料理（食）、その他、の9カテゴリに分類し、その「記述の方向（主旨）」や「記述の展開（補足）」が「ポジティブ」な内容かまたは「ネガティブ」な内容かを判定。「記述の対象（主語）」について、「製品種類」及び「栄養健康機能」別に出現頻度をカウント、それらをグループ分けし、記述出出現頻度の可視化。「栄養健康機能」に係る記述において、そのエビデンス（科学的根拠）に係る出典やデータが示されているかどうかをチェック

### (3) 評価別に見た出現記述

記述の方向性（ベクトル）を 良い評価、悪い評価、事実の記述（評価は行われていない）の3つのグループに分け出現記述の再整理を行った。

## 調査の主な結果（概要）

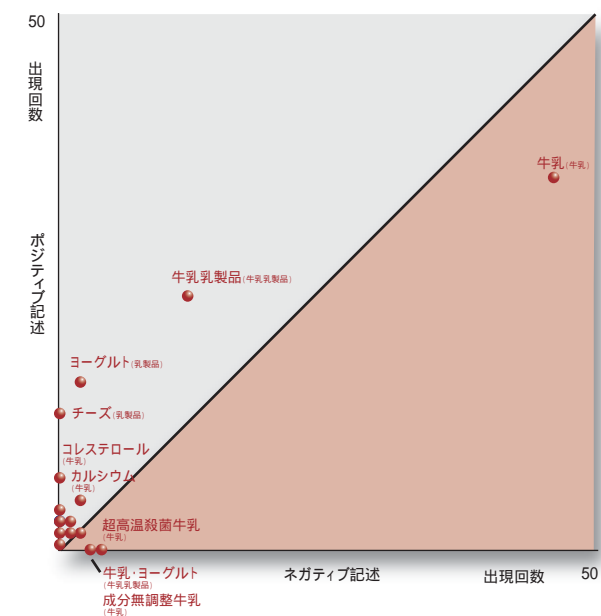
### 記述の評価と出現頻度

「記述の対象（主語）」を9つのカテゴリに分類し、その「記述の方向（主旨）」や「記述の展開（補足）」が「ポジティブ」な内容かまたは「ネガティブ」な内容かを判定した。さらにそれらをグループ分けし、記述出出現頻度の可視化を行った。

### 製品種類別に見た評価と出現頻度

記述対象（主語）を製品種類別に見た場合、総体的にポジティブ記述が多く見られるが、出現頻度の高い牛乳、牛乳乳製品が主語となっているものはネガティブ記述も多く出ていることがわかる。

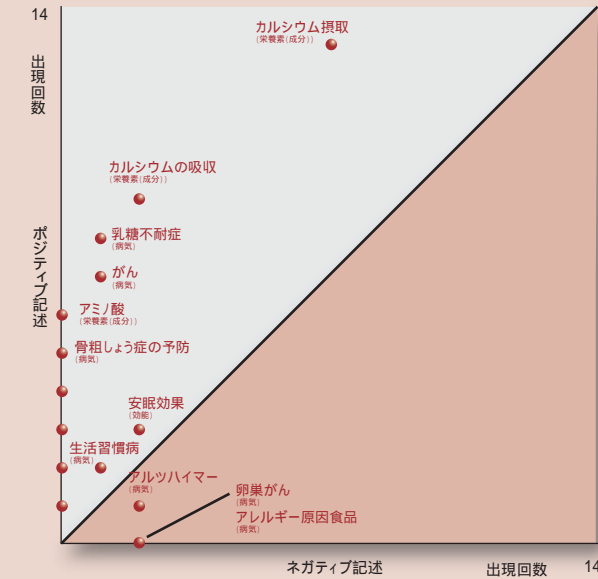
### 製品種類別に見た評価と出現頻度



## 機能別に見た評価と出現頻度

記述対象（主語）がカルシウムは、出現頻度が高く、ポジティブな記述が多いことがわかる。また、病気カテゴリのうち、「アレルギー原因食品」などにネガティブ記述が出ていることがわかる。

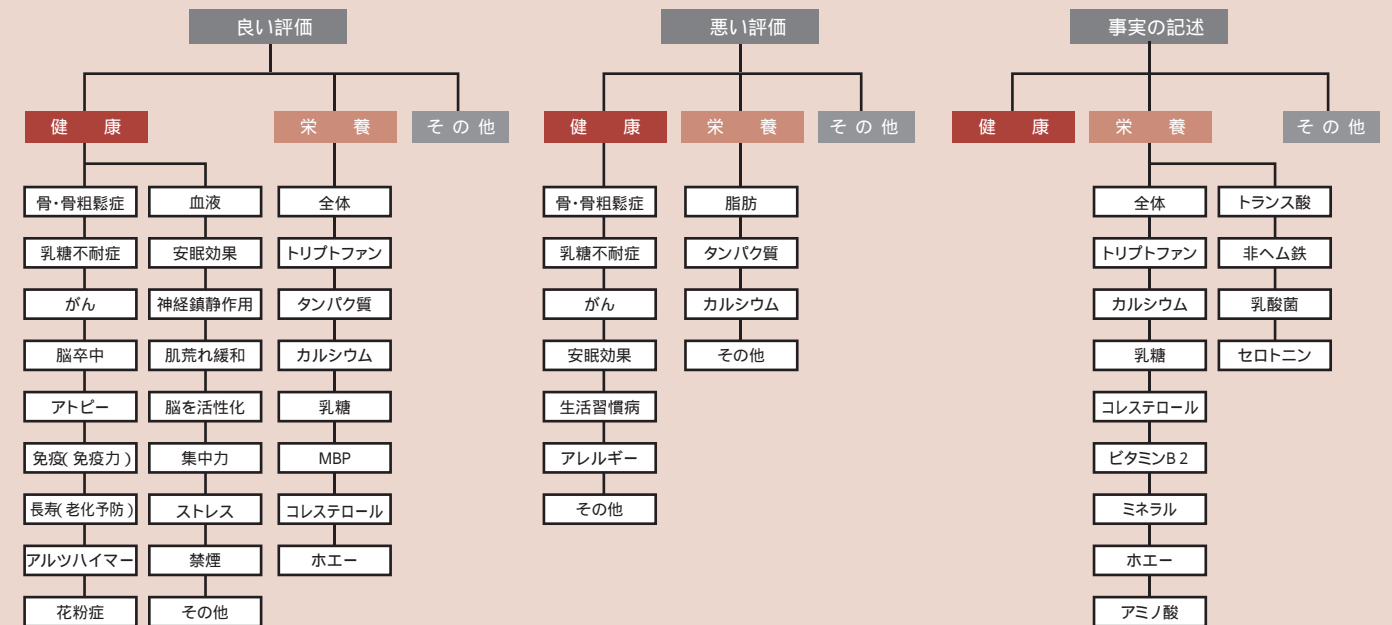
### 機能別に見た評価と出現頻度



## 評価別に見た出現記述

記述の方向性（ベクトル）を 良い評価、悪い評価、事実の記述（評価は行われていない）の3つのグループに分け出現記述の再整理を行った。

### 評価別に見た出現記述



## 調査のまとめ

今回の書籍分析では、約1,000冊の書籍リストアップからはじまり、最終分析対象を88冊までに絞ったが、牛乳乳製品の影響健康機能については、多くがポジティブな記述であり、日本人の栄養や健康といった観点からは、牛乳乳製品に対する高い社会的評価が定着していることを示している。

しかし、ネガティブな記述を基調とする書籍が、少数ではあるが、普及率（売上）では極めて上位に位置しており、その影響は無視できない。

また、これらの書籍における記述には、エビデンスデータや研究論文の出典等が付記されていない場合が殆どで、「ではこう言われている。」など、他の書籍などから、単純に引用している場合が多い。このことからネガティブ評価の元となる文献は相当に限定されたものであることが推察される。

こうしたネガティブな情報を書籍から得た生活者の誤った思い込みに対し、特に現場の栄養士や栄養教諭、医師等のインフルエンサーの科学的なエビデンス情報を踏まえた適切な対応が重要となる。

牛乳乳製品の価値をめぐる生活者との適切なコミュニケーション戦略構築のためにも、本調査は重要な参考資料となる。（本調査報告書はHPに掲載予定、また更に雑誌の記述に関しても調査を検討）

牛乳食育研修会の開催報告

## 牛乳製品を食育学習の教材に。栄養教諭の実践研修

開催日：平成24年9月27日、28日 開催場所：東京

「食と健康」の理解促進の観点から、学校給食及び家庭でも身近な食品である牛乳を活用し、栄養教諭及び学校栄養職員などが積極的な食育活動を推進するための研修会を、9月27日、28日の2日間にわたり東京で開催した。

この研修会は、文部科学省及び農林水産省の後援を受け、公益社団法人全国学校栄養士協議会及び社団法人中央酪農会議の協力のもと、全国5カ所（東京、仙台、岡山、大阪、博多）での開催を予定。参加する栄養教諭・栄養職員は、都道府県教育委員会を通し推薦された方となっており、内容も目的達成のために充実したプログラムとなっている。

## 生乳生産から子供たちの栄養、栄養教諭の役割までを解説

この研修会は、生産現場を知る酪農家、子供の成長、栄養に携わっている医師、牛乳食育教材の制作に携わった先生から講演をいただき、牛乳を食育に取り入れるための基礎的な知識を学ぶことから始まった。



吉田 恭寛氏

酪農家の吉田氏からは、まず生産現場である牧場の風景と母牛の出産の様子がDVDで紹介された。その後、乳牛が生まれてからのライフサイクルなどを解説。生乳が生産され出荷されるまでのサプライチェーンの話の中では、学

校給食に並ぶまでには、色々な方々の手を経ていることなども説明いただいた。

小児科医でもある児玉氏からは、身長が伸びるということは、骨が伸びるという内容でお話いただいた。その要因として挙げられたのは、内的要因として遺伝、ホルモンによる影響が挙げられ、外的要因として食生活、運動、睡眠、さらに最近では虐待などによる精神的ストレスも影響すると報告された。また、日本の小児における17歳の平均身長をみると、第二次大戦後男性で約10cm、女性で約6cm高くなった。これは主に栄養状態の改善だと考えられるが、平成5年をピークに男女ともに20年近く大きな変動がみられない、と現状報告された。



児玉 浩子氏

学校教育において食育を推進するために田中氏は、栄養教諭が果たすべき役割は大きいと述べた。

特にその専門性を活かして、子どもの食をめぐる実態の調査と報告、学校での食育の全体計画の立案における助言、学校の教育課程全体での単元指導計画や学習指導案の作成における助言、チーム・ティーチングによる児童生徒への指導、食にかかわる児童生徒向け・保護者向け啓発用教材の作成や広報活動、校内の教職員への食育に関する資料提供と実践化の積極的な推進、子どもの食にかかわる状況の改善に関する調査と報告、自校の食教育の改善プランの提案と実践、以上、理想論であり全て実行できないと思うが、この様なことを栄養士の先生が行うことが大事になってくると述べた。



田中 博之氏

## 次 第

## 開会挨拶

講演「酪農現場で牛乳のミルクサプライチェーン」  
吉田牧場 牧場のログハウスちちぶ路 吉田 恭寛氏  
講演「小児科医からみた子供の成長に不可欠な栄養バランス」  
帝京平成大学健康メディカル学部健康栄養学科教授・学科長 児玉 浩子氏  
講演「牛乳食育教材の活用とその授業展開方法」  
早稲田大学教職大学院 教授 田中 博之氏

(公社)全国学校栄養士協議会 会長 長島 美保子氏  
(公社)全国学校栄養士協議会 副会長 駒場 啓子氏

ワークショップ「牛乳食育教材を活用した学習指導計画の作成」

27日

## ワークショップ

「学習指導計画による授業の進め方と板書計画・ワークシートなどの作成」

## グループ発表

「ワークショップのグループ成果発表・ショート模擬授業」

28日



講演風景



ワークショップで指導計画を作成



紙芝居を使った朗読風景



長島会長がアドバイス



グループ発表のショート模擬授業

## モデル教材を活用した指導計画を作成、模擬授業に取り組む

参加した栄養教諭は、3つの班に分かれ「背を伸ばすライフスタイル」、「食品の流通を牛乳で学ぶ」、「"いただきます！"の意味ってなんだろう」の3つのテーマでワークショップ活動を行った。

「ミルクで制作したワークショップテキスト「グッと身近な食育ハンドブック牛乳編」を活用した指導案作成が中心となったワークショップでは、単元について、指導のねらい・目標、学習指導（展開）、評価を明確にし、ショート模擬授業に向けた板書計画、シナリオまでを3時間程度で行うというハードな内容となった。

各グループの発表後、田中先生の講評があり、5年生という対象年齢を考えると、言葉がむずかしい。小学生は音声で聞いたものはすぐ抜けていく。板書して視覚からの記憶の助けも。

答えが出たらOKという正解主義ではなく、子供の考える力、認識を深める工夫。

3～4回牛を生んだら廃牛。ライフサイクルの短さ、はかなさ、その裏に感謝があることを理解させる。子どものイメージを喚起する方法としてのPOP（視覚補助教材）等の活用などの指摘がなされた。

ワークショップでアドバイザーを務めた長島会長は「あつという間に研修が終わりましたが、目的は、限られた時間の中で、身の回りにある資料を使って授業を組み立てていくことであり、この研修会で初めて会った方々と授業を作り上げていったということでも大変意義のある時間だったと思います。田中先生からもご指摘いただきましたが、栄養教諭として不足しているところ、また今後資質を磨かなければいけない部分について、沢山のご指導を頂いたので今後に生かせるのではないかと思います。」と研修会を総括した。

## 牛乳食育研修会開催予定

日時	平成24年10月11日(木)～12日(金)	平成24年10月25日(木)～26日(金)	平成24年11月8日(木)～9日(金)	平成24年11月29日(木)～30日(金)
場所	仙 台	岡 山	大 阪	福 岡
第一日	「酪農現場と牛乳のミルクサプライチェーン」			
	くずまき高原牧場 木村元思	有限会社安富牧場 安富正史	フラワーステーション花房牧場 花房亨一郎	選定中
	「小児科医からみた子供の成長に不可欠な栄養バランス」			
第二日	「牛乳食育教材の活用とその授業展開方法」			
	もりおか子ども病院院長 米沢俊一	岡山済生会総合病院小児科部長 田中弘之	大阪府立母子保健総合センター研究所 環境影響部門部長 道上敏美	尚絅大学生活科学部栄養科学科教授 西山宗六
	(公社)全国学校栄養士協議会 副会長 田川恵子 理事 大槻友子 武庫川女子大学文学部教育学科専任講師 藤本勇二	(公社)全国学校栄養士協議会 会長 長島美保子 理事 大須賀恭子	(公社)全国学校栄養士協議会 副会長 駒場啓子 理事 小笠原陸 早稲田大学教職大学院教授 田中博之	(公社)全国学校栄養士協議会 会長 長島美保子 理事 福岡ちづる
ワークショップ	「牛乳食育教材を活用した学習指導計画の作成」			
ワークショップ	「学習指導計画による授業の進め方と板書計画・ワークシートなどの作成」			
グループ発表	「ワークショップのグループ成果発表・ショート模擬授業」			

第1回栄養士向け情報開発研究会を開催

## 生活者、栄養士それぞれの課題を検証し、情報発信ツールの開発へ

開催日：平成24年8月13日 開催場所：東京

8月13日、Jミルク会議室において、「第1回栄養士向け情報開発研究会」が開催された。この研究会は、栄養士が、食生活と牛乳乳製品を含めた食品の栄養に関する、わかりやすく使いやすい情報の開発及びその活用方法を確立することを目的としている。

## 課題およびニーズを踏まえた具体的なテーマの設定

今回の研究会開催の前段階（準備会議）において「検討テーマ」設定のためにアンケート調査を行った。

このアンケートから見えた課題として、生活者に対しては、食品の栄養は理解しているものの活用方法が身につけていない、健康に対する関心が高まりつつも、食事で（将来の）病気などを予防しようとする意識が若年層で特に少ない、マスコミなどメディアからの情報に食生活が左右されやすい状況、が挙げられた。

また、栄養士に対しては、若年層や高齢者層では、抱えている課題が異なることから、家族で食事を作っている人に対してどのような指導を行うか、マスコミなどのメディア、医師の著書などの情報で極端な健康法やダイエツ

## 協議

- (1) 栄養士向け情報開発研究会の設置について
- (2) 座長・副座長の選出について
- (3) 課題及びニーズを踏まえた具体的なテーマの設定について
- (4) 今後のスケジュールについて
- (5) その他



## 第1回栄養士向け情報開発研究会 委員

氏名	所属	役職
林 進	東京慈恵会医科大学葛飾医療センター	栄養部課長
西村 一弘	社会福祉法人緑風会 緑風荘病院	栄養室・健康推進部主任
網谷 陽子	公益財団法人結核予防会第一健康相談所 生活習慣病予防・研究センター	
飯田 和子	株式会社WA・ON	代表取締役
萩原 スミ子	元プリヂェストン横浜生協	
三浦 直子	社団法人日本栄養士会	課長補佐

は座長、 は副座長

トを行っている人への指導が挙げられた。

これらアンケートの結果を踏まえ、食品の特徴を活かした食事への活用方法（食べ合わせ）、若年層を対象とした将来の自分を想定した食事のあり方、マスコミの情報や医師の著書等への対応、を「検討テーマ」として議論を展開した。

## 個人のライフスタイルに合わせた対応が必要

議論が展開される中で、現状の消費動向を検証していくと、個人のライフスタイルで消費動向が大きく異なっていることが注目された。

個人のライフスタイルを見ていくと性別、世代、時代背景、家族構成、1日の行動パターン、一生涯のライフステージなど要素が多岐にわたっていることが共通認識された。

特に子供の牛乳消費に課題が当てられたが、母親がバブルを経験した世代を境に、その子供たちの消費に大きな変化が表れてきていると事務局から報告された。

バブルを経験した母親に関しては、お金を出せばどこでも、何でも購入できるということを経験しており、それ以前の母親たちの食生活管理行動と全く違っているという。

実際に牛乳の消費量は、大人も子供もどちらも落ちているが、大人の消費量が落ちるスピードよりも、子供の方がはるかに消費量が落ちている。別の見方をすると子供のいる家庭ほど牛乳の消費量が落ちている現状があるという。

これらのような現状、さらに詳細な情報を整理し、生活者や栄養士に向けて情報のツール化を行っていくことを次の研究会課題とした。

## 各地で栄養士向けセミナーを開催（大阪府、新潟県、北海道）

日時・場所：大阪府 平成24年6月24日（日）  
「シニアの健康と牛乳～いきいき暮らすために」  
新潟県 平成24年9月 8日（土）  
「シニアの健康と牛乳～いきいき暮らすために」  
北海道 平成24年9月 17日（月）  
「牛乳の3次機能と生活習慣病予防」

実施内容：

- 第一部 基調講演
- 第二部 パネリスト講話
- 第三部 パネルディスカッション

大阪府会場講師：

大日向耕作先生  
（京都大学大学院農学研究科食品生物科学専攻食品生理機能学分野准教授）  
伊木雅之先生（近畿大学医学部公衆衛生学教授）  
廣田孝子先生（京都光華女子大学健康科学部健康栄養学科教授）  
小山浩子先生（料理家・管理栄養士・フードコーディネーター）

新潟県会場講師：

八村 敏志先生（東京大学大学院農学生命科学研究科免疫制御研究室 准教授）  
林 泰史先生（東京都リハビリテーション病院 院長）  
塚原 典子先生（新潟医療福祉大学健康科学部健康栄養学科 大学院医療福祉学研究科 准教授）  
小山浩子先生（料理家・管理栄養士・フードコーディネーター）

北海道会場講師：

玖村 朗人先生（北海道大学大学院農学研究科 教授）  
宮崎 滋先生（公益財団法人結核予防会新山手病院 生活習慣病センター長）  
上西 一弘先生（女子栄養大学栄養生理学研究室 教授）  
小山浩子先生（料理家・管理栄養士・フードコーディネーター）

6月から10月にかけて、管理栄養士、栄養士、学生、一般を対象としたセミナーを各道府県の栄養士会及び公益社団法人日本栄養士会の主催、Jミルクの共催により開催した。セミナーは、基調講演、パネリスト講話、パネルディスカッションの三部構成とし、3会場ではそれぞれ200名前後の栄養士等が参加した。参加者からは、高齢者に向けた牛乳乳製品の摂取量や摂取の際気を付けること、料理での活用法やレシピなど具体的な質問が相次ぎ、活気のあるセミナーとなった。



## 医師向けランチョンセミナーを開催（東京都）

実施日時：平成24年6月30日（土）

実施場所：東京国際フォーラム

実施内容：第54回日本老年医学会学術集会  
「ランチョンセミナー17」

座長：折茂 肇 先生

（骨粗鬆症財団理事長・日本抗加齢協会理事長）

1. 牛乳・乳製品摂取と骨折・骨粗鬆症

演者：伊木 雅之 先生（近畿大学医学部公衆衛生学 教授）

2. ロコモティブシンドロームと牛乳

演者：石橋 英明 先生

（医療法人一心会 伊奈病院整形外科部長  
高齢者運動器疾患研究所 代表理事）

セミナーでは、骨粗鬆症の症例や運動機能を低下させないことが様々な疾患の予防につながるなどの報告がされた。

質疑応答では、「アメリカの牛乳乳製品はビタミンDが添加されているものが多いが日本では」、と具体的な質問があり「日本ではビタミンD添加の牛乳乳製品は少ない」「今まではビタミンDの多くを魚から摂っていたため不足は少なかったが、最近では若い女性にD不足が多い。日光に当たることを拒み、魚を摂らなくなっている。」と報告された。



Jミルクの活動

## 6～9月の主な活動報告

平成24年6月1日から平成24年9月30日まで

## 企画情報グループ関連

放射性物質問題への対応

&lt;委員会の開催等&gt;

放射性物質対策連絡会（6月19日、7月9日）

内容： JミルクHPでの対応状況 生産段階での取り組みの広報活動のあり方について Jミルク「災害等支援環境整備事業」について

&lt;主な推進業務&gt;

Jミルク「災害等支援環境整備事業」の実施要領（案）の作成

「畜産物の放射性物質の安全性に関する文献調査報告書」（東大食の安全研究センター編）の配布

「災害等支援環境整備事業」説明会（8月10日）

内容：事業内容・申請方法等の説明

需給見通しの実施

&lt;委員会の開催等&gt;

第2回需給委員会（7月11日）

内容：平成24年度上期の生乳並びに牛乳乳製品の需給見直し検討協議（7月20日）

「牛乳類の販売・需要者動向調査」研究会

&lt;主な推進業務&gt;

「需給予測」手法の精緻化に関する検討

小売店舗データ・消費者パネルデータを活用した消費構造分析作業

乳製品需要者動向調査の検討・実施（パン菓子製造会社等へのヒアリング）

牛乳類の小売動向調査の検討・設計作業

ポジティブリスト制度対応

&lt;委員会の開催等&gt;

第2回ポジティブリスト委員会（7月18日）

内容：酪農生産者段階の記帳・記録の徹底への取り組みについて

需給委員会



需給見直し記者レク



ポジティブリスト委員会

第3回ポジティブリスト委員会（9月26日）

内容：平成24年度定期的検査の管理対象物質の検討決定、ポジティブリスト制度対応の取り組み推進についての要請内容の確認、ポジティブリスト制度への酪農乳業一体的取り組みの普及啓発パンフレット内容

&lt;主な推進業務&gt;

平成24年度の定期的検査管理対象物質の検討 生産現場での「記帳・記録」の徹底を図るための啓発パンフレットの作成

生乳検査精度関連

&lt;委員会の開催等&gt;

生乳検査担当者研修会（8月8日、乳業技術協会主催）

内容：生乳検査精度認証制度の説明

信頼性確保部門責任者研修会（8月30日）

&lt;主な推進業務&gt;

生乳検査精度管理認証規程の改定

平成24年度第1回外部精度管理調査結果逸脱施設からの改善報告書内部審査

信頼性確保部門研修会



課題検討委員会

共通課題への取り組み

&lt;委員会の開催等&gt;

課題検討委員会WT第5回、第6回会議（6月23日、7月24日）

内容：貿易自由化シミュレーション内容の協議、中間とりまとめの最終協議

第1回課題検討委員会（8月2日）

内容：貿易自由化シミュレーション（中間とりまとめ）の報告・検討

第1回需給取引専門部会（9月11日）

内容：24年度上期の事業進捗状況の報告、24年度事業の課題と今後の取り組みの検証、評価

## 普及グループ関連

牛乳乳製品健康科学情報事業関連

&lt;委員会の開催等&gt;

牛乳乳製品健康科学会議「生活習慣病」分科会（6月27日・9月20日）

内容：平成7年度以降の生活習慣病関連委託研究63件の評価等

同「骨」分科会（7月9日、8月15日）

内容：平成7年度以降の骨・骨粗鬆症関連委託研究150件の評価並びに研究案件の選択及び総説執筆分担等について 同リラックス・安眠分科会（9月17日）

内容：睡眠の質について、また「不定愁訴に関する横断研究」についての論文原案作成等

&lt;主な推進業務&gt;

牛乳健康機能実態調査及びその後の介入研究から得られたエビデンスに係る学術誌への論文投稿およびメディア広報の準備 日本酪農科学会シンポジウムで「牛乳摂取とメタボ」研究速報の発表

牛乳食育事業関連

&lt;委員会の開催等&gt;

食育に関する関係団体意見交換会（6月5日）

内容：酪農乳業団体における食育関連事業の実施状況に関する情報共有と今後の連携について

「牛乳食育研究会」設立準備会（6月16日、7月17日、8月26日）

内容：設立趣意書、設立発起人、当初会員、会則当の原案を決定。設立総会を10月8日に

&lt;主な推進業務&gt;

「牛乳を活用した食育モデル教材」の制作・編集

「牛乳食育研修会」のプログラムの精緻化と講師陣との協議

牛乳乳製品価値向上活動事業関連

&lt;委員会の開催等&gt;

「乳の社会文化ネットワーク」会員情報交換会議（6月1日）

内容：各委員の研究活動等を紹介、および委託研究の公募の方法等について

公募研究、指名研究審査委員会（9月25日）

&lt;主な推進業務&gt;

委託研究の公募選定

インフルエンサー情報活動事業関連

&lt;委員会の開催等&gt;

第1回栄養士向け情報開発研究会（8月13日、10頁に記事掲載）

&lt;セミナー等の開催&gt;

栄養士セミナー（11ページに記事掲載）

老年医学会ランチョンセミナー（6月30日、11ページに記事掲載）

業界向け情報発信事業関連

Seminar ●●●●●

## 業界向けセミナーの開催

8月2日に大阪、翌3日に福岡で「運動と牛乳摂取で暑さに負けない体力づくり」をテーマとしたセミナーを開催。運動の方法、子どもでの効果は、など活発な質疑応答が展開された。

信州大学医学系研究科  
スポーツ医学分野教授  
能勢 博氏

学校給食用牛乳飲用定着事業関連

< 委員会の開催等 >

学乳問題特別委員会の設置準備打合せ（6月18日）

内容：委員会の設置に向けた関係全国団体による打合わせ

活動運営管理事業関連

< 委員会の開催等 >

第2回マーケティング委員会（6月21日）

内容：普及関連事業および広報関連事業の報告・意見聴取 WEBサイトリニューアルの企画、「牛乳乳製品に関する食生活動向調査」設計の協議

第3回マーケティング委員会（9月11日）

内容：同上

第1回普及専門部会（9月26日）

内容：平成24年度上期事業報告、各種調査報告、「牛乳摂取とメタボリックシンドローム」論文投稿、普及活動について、HPリニューアルについて

< 主な推進業務 >

「牛乳乳製品に関する食生活動向調査」の設計。マーケティング委員会、普及専門部会での検討結果および学習院大学上田教授の指導を受け、本年度より定期的に調査する。（関連記事15頁）



理事会

総務関連事業

< 会議の開催等 >

第3回理事会（8月7日、臨時総会の招集、役員補選、一般社団法人移行認可申請）

第1回臨時総会（8月24日、役員補選、収支予算補正）書面議決併用で開催

第2回臨時総会（9月20日、役員補選）書面議決併用で開催

第1回、第2回臨時総会における理事の補選について  
8月24日に開催した第1回臨時総会において、松尾和重、谷尻順一両氏の退任に伴い理事の補選を行った。また、9月20日に開催した第2回臨時総会において、小玉昭吉、千葉靖代両氏の退任に伴い理事の補選を行った。任期は共に13年度通常総会開催日までとなる。

第1回臨時総会における新理事

橋本 正敏氏（全国牛乳流通改善協会会長）

高橋 束氏（全国牛乳商業組合連合会会長）

第2回臨時総会における新理事

但野 忠義氏（東北生乳販売農業協同組合連合会代表理事会長）

倉橋 準典氏（近畿生乳販売農業協同組合連合会代表理事会長）

一般社団法人移行申請関係

研修会「一般法人移行後の会計実務と会計システムの構築」へ参加（6月7日）

移行申請書（公益目的支出計画等）内容の主務官庁との事前協議（7月18日）

内閣府公益認定等委員会への窓口相談（7月30日）

講習会出席（公益法人に対する平成24年度税務調査の着眼点とその対策、8月22日）

移行認可申請書を内閣府公益認定委員会へ提出（8月27日）

総務広報グループ関連

広報関連事業

< 主な広報活動等 >

第29回メディアミルクセミナー「節電の夏、運動と牛乳摂取で体力づくり」

メディアへのリリース＝業界向けセミナー（大坂、福岡）の開催について。「夏休みの栄養バランス」リーフレット発行について。記者会見＝「平成24年度上期の生乳及び牛乳乳製品の需給見通し」

「韓国ソウル牛乳」来会（7月2日）、Jミルク活動等の説明「中国社会科学院農村発展研究所調査団」来会（8月8日）、Jミルク事業およびポジティブリスト制度等への取り組み内容を説明

マスメディア取材対応（8月13日、NHK生活・食料番組部、日本食糧新聞）

< 主な推進業務 >

WEBサイトリニューアル

メディアツアーの企画策定および現地ロケハン

Pick Up

Jミルク調査活動

# 「牛乳乳製品に関する食生活動向調査」を開始

食生活の構造的変化を把握。さらに子どもを持つ主婦の牛乳乳製品に関する意識変化を捕捉。

Jミルクでは、牛乳乳製品普及関連事業の戦略に基づき、平成24年度から「牛乳乳製品に関する食生活動向調査」を開始する。

この調査の目的は、以下のとおりである。

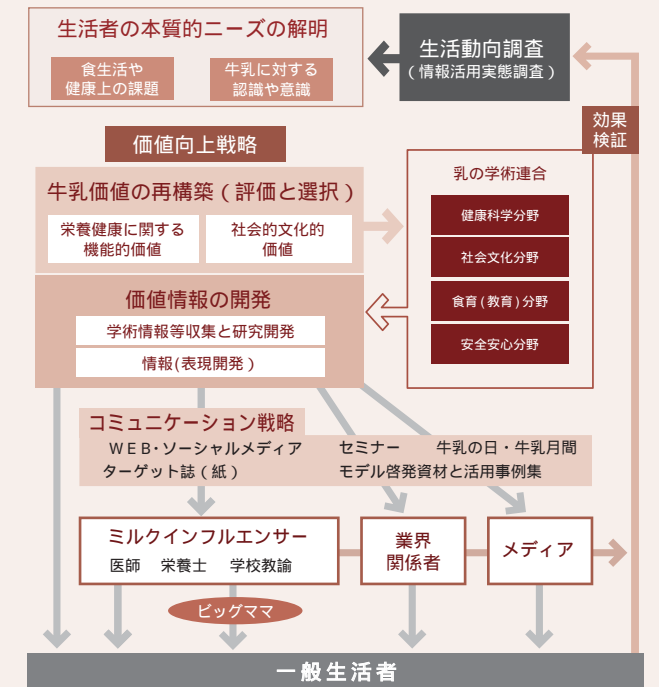
- 日本人の食生活における牛乳等の消費の変化動向を、量及び質の両面から構造的に把握することによって、牛乳等に関する生活者の価値認識の向上を図る施策のヒントを得る。
- Jミルクにおける牛乳等普及に係るコミュニケーション活動の効果検証（提供する情報がどの程度評価され活用されているのか？牛乳の相対的価値をどれだけ高められたか？）の指標とする。

調査概要

	第一次調査	第二次調査
調査手法	インターネットを活用した生活者パネルに対する年1回のアンケート調査	
対象者	15～60代の男女	3～18才の子どもを持つ主婦（Jミルクのメインターゲット）
サンプル数	10,000サンプル	600サンプル
実施時期	毎年10月	毎年11月
割付	総務省統計局の平成22年の人口構成データなどを参考に実際の性別、年代、地域の構成比に近似させる。	

牛乳乳製品普及関連事業の戦略図

牛乳乳製品の価値向上に役立ったり結びついたりする情報の提供



調査設計概略

基本的な分析軸  
（男女全世代 対象）

- ・「性・年代」といったデモグラフィック属性や家族構成といったプロフィール
- ・牛乳類全般の飲用（利用）頻度、牛乳に対する価値認識（子どもを持つ主婦 対象）
- ・子供に希望する牛乳飲用頻度、子供や家族にとっての牛乳の価値認識

基本軸と以下項目とのクロス集計等を継続的に実施し意識・行動の変化を把握する。

- ・健康意識、食生活全般への意識
- ・生活情報をどこから得ているか、影響度、影響度の変化
- ・4つの重点訴求機能（骨の健康強化・骨粗鬆症予防機能/リラックス安眠機能/生活習慣病予防機能/免疫力調節機能）に関連する健康意識・将来意識
- ・牛乳、酪農家、乳業会社、販売店、牛乳自体に対する共感や信頼の意識
- ・牛乳への関与変化状況とその原因
- ・「牛乳好き・嫌い」といった態度形成に係る「思い出」など幅広く確認していく。



ホームページをリニューアル

## 機能性を重視してホームページを改訂

ミルクインフルエンサーに向けた情報サイト

10月よりJミルクのホームページをリニューアル。今回のリニューアルでは、下記の4つのコンセプトを掲げた。

1. **インテリジェンス** (課題解決型情報の発信)
2. **革新的** (Jミルクの改革の形、他のサイトとの差別化)
3. **共感性** (酪農乳業産業を構築するステークホルダーとのキズナ、酪農乳業と生活者のキズナ)
4. **信頼性** (「豊かな専門性」「一生懸命さ」「同じ目線」の3つの要素)

デザインでは特に「革新的」×「共感性」を重視した。



トップページ

業界向けトップページ▶

### アイコンやパステル系の色使いで親しみやすさを

メインビジュアルについては、Jミルクが打ち出すメッセージ性を象徴するビジュアルで、親しみやすくまとめた。コンテンツについて記事の部分は、読み物らしく見えるよう、見え方に配慮した。

業界向けトップページでは、様々なデータ類を整理し、検索しやすくまとめた。



注目データ

## 超円高でも止まらない原油や飼料価格の高騰

穀物価格が高騰しているにもかかわらず、円高のため畜産界は実態が見えていない

### 円高メリットが見えない生産現場の輸入品

欧米経済の先行きを懸念して8月20日、対ドル円相場は、史上最高値の1ドル75円95銭をつけた。これは1998年8月の月中平均144円67銭から14年ほどで1.9倍もの円高水準である。

超円高の原因は2008年夏のリーマンショックを引き起こした米国発の「世界金融危機」から始まり、「欧州債務危機」が深刻化して世界経済が不安定になって来たからといわれている。

この急速な超円高により日本の自動車、電機などの輸出産業に大きな打撃を与えていることは周知の事実である。

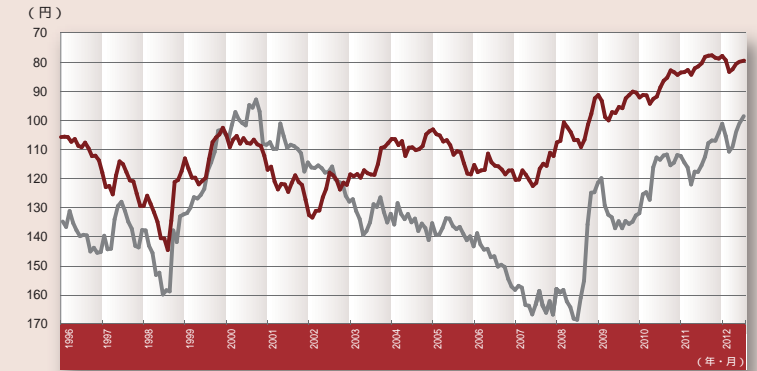
では、この超円高により恩恵を受けるはずの輸入に関して試みる。特に牛乳乳製品の生産現場に影響がある原油価格をみると、リーマンショックの時期に急激な下落を見せたが、徐々に価格は高騰し、過去最高値に迫る勢いとなっている。これはシリア内戦の激化や経済制裁に伴うイラン産原油の禁輸など中東情勢の緊張などが背景にある。

また、乳製品の国際価格は2011年後半から下落基調がみられるが、自然環境の変化や世界における需給状況により大きく変動することも考えられるため、超円高だけでは測れない。

このように本来、円高によるメリットとして捉えられる輸入品も世界経済や自然環境の影響により、その恩恵が見えてこないのが実情であろう。

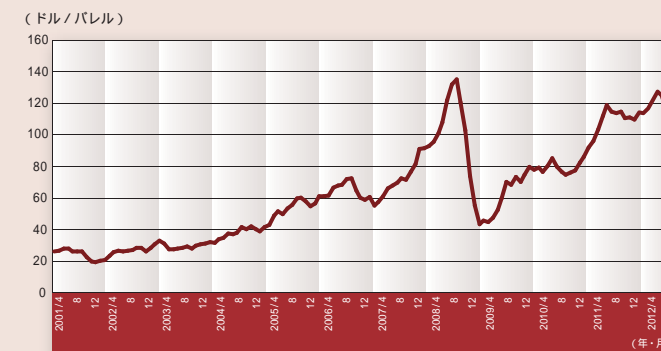
一方、輸出企業においては企業のコスト削減努力の限界を大きく超えるものと、政府・日銀に対し、円高の是正に向けた実効性の高い対応を早急に実施するよう求めており、今後、牛乳乳製品の生産現場や市場に影響がある輸入品がさらに高値になることが懸念される。

### 円相場の推移 (ドル・ユーロ)



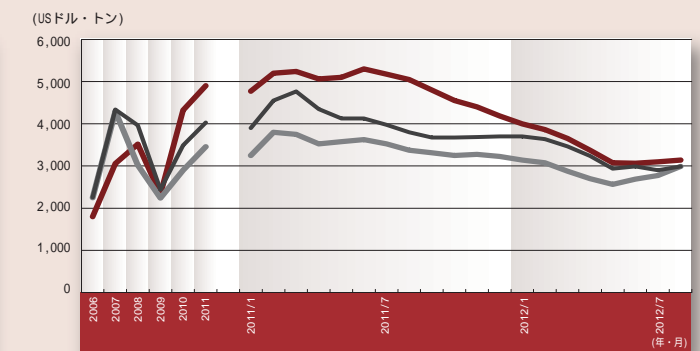
資料：三菱東京UFJ銀行 月中平均TTS  
注意：ユーロは裁定相場。  
裁定相場とは、市場で実際に取引が行われた相場ではなく、共通の通貨に対する為替相場から、2つの通貨の為替相場を計算して求めたものです。

### 原油CIF価格の推移



資料：財務省 通関(CIF)ベース  
注意：1バレル=158.99リットル

### 乳製品の国際価格の推移



資料：ZMB (2009年以降)、ZMP (2008年まで)  
注1：国際価格は、93年から高値と安値の単純平均。西欧積み出し港のFOB価格。  
注2：年別は平均。  
注3：\*は暫定値

酪農乳業の情勢

# 危惧される米国中西部の干ばつと穀物高騰

配合飼料は大幅な値上げが確実視される状況

世界最大の穀物生産地域である米国中西部穀倉地帯は、五大湖南西に広がっており、生産されるトウモロコシは年間約3億1千万トンに上り、全世界のトウモロコシ生産量約8億7千万トンの実に36%を占めている（2011年産）。

そのため、この地域での作況は全世界に大きな影響を与えることになる。



## 最新の生産予測と輸入産地の多角化の進行

米農務省が9月12日発表した最新の米穀物需給報告で、干ばつの影響で今年のトウモロコシの生産量予想を下方修正した。これは6年ぶりの低水準となる見通しだが、市場の予想よりは上回っており3年間続く供給不足が和らぐとみられている。

また、米農務省は今年の大豆生産量予想を8月時点から2%引き下げた。繰越期末在庫は8年ぶりの低さだが、こちらも市場の予想をやや上回っている。

このような市場予想の中、トウモロコシのシカゴ相場は7月19日に8ドル/ブッシェルを突破。9月以降、収穫期を迎えて天候予想で好天が続く見込みであることから若干値を下げているが、依然として高値圏での推移が続いている。

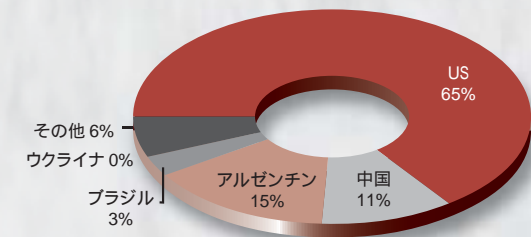
一方、トウモロコシの世界輸出市場をみると、米国産のシェアは、この約10年で65%から35%まで減少している。これは、米国内でエタノールの需要が増加していること。また南米（ブラジル・アルゼンチン）や東欧（ウクライナ、ルーマニア）においてトウモロコシ価格の上昇を受けて生産量が増加していることなどから、輸出市場のシェアが大幅に変化している。

このような輸出市場の多角化を受けて、日本の輸入先も干ばつの影響による米国産の減産からブラジル産など米国以外の産地へのシフトが進みつつある。

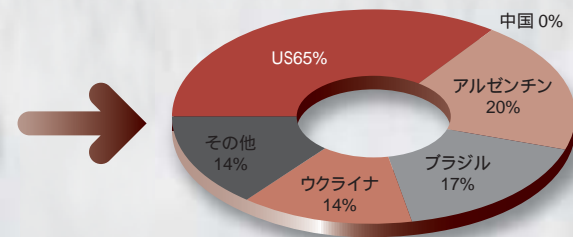
トウモロコシのシカゴ相場の推移



2001 / 02 コーン輸出シェア



2012 / 13 コーン輸出シェア



全国酪農協同組合連合会購買部より情報提供

## 「乳の社会文化価値」に係る学術研究の委託研究者が決定

「乳の社会文化ネットワーク」は、Jミルクと共同して、平成24年度「乳の社会文化価値」に係る学術研究を行う。

この学術研究は、特定の研究者等にテーマを指定して実施する指名委託研究、及び研究テーマを広く公募した公募委託研究とし、9月末日に委託研究者が決定した。選定基準は、「乳の社会文化価値」の目的と合致している、研究結果の知見に新規性・発展性がある、の2点とした。

### 指名委託研究者

氏名	所属	役職	推薦者	テーマ
中澤 弥子	長野県短期大学	教授	江原 絢子	日本の学校給食における牛乳利用の歴史的评价
栢 英彦	日本大学生物資源科学部	非常勤講師	和仁 皓明	日本におけるチーズ製造の歴史的发展
北澤 春樹	東北大学大学院農学研究科	准教授	細野 明義	安心・安全な牛乳生産の産地技術向上を目指したプロバイオティクス利用の社会的貢献
細野 ひろみ	東京大学大学院農学生命科学研究科	准教授	生源寺 真一	乳をめぐるリスクコミュニケーションの現状と課題 (乳をめぐるリスクコミュニケーションツールの開発)
小野 史	(独)農業・食品産業技術総合研究機構 中央農業総合研究センター	契約研究員	栄養部 課長	世帯における牛乳・乳製品の消費習慣と利用方法 ～子育て世帯の食卓に注目して～

### 公募委託研究者

氏名	所属	役職	形態	テーマ
増田 仁	熊本大学教育学部	講師	個人	戦後日本における乳製品の普及と家庭に関する社会的分析 ～教育現場から家庭・地域へ介入する食教育の再検討～
武藤 康弘	奈良女子大学文学部	教授	共同	中国内モンゴル自治区における乳製品加工システムの地域性に関する研究
水野 眞佐雄	北海道大学大学院教育学研究員	教授	個人	牛乳乳製品の飲用習慣形成へ与える新要因としての身体運動・スポーツの役割
上野 恭裕	大阪府立大学経済学部	教授	共同	牛乳宅配事業が牛乳飲用習慣の形成に及ぼす影響要因の国際比較研究

今後のスケジュール 平成24年10月1日～平成24年12月31日までの会議・行事の開催予定を掲載致します。

	開催日	場所	内容	講師(敬称略)
健康科学会議 幹事会	10月3日	Jミルク会議室	来年度学術研究テーマの選定。総説制作の確認。新規会員の認定他。	折茂肇ほか6名
牛乳食育研究会 設立総会	10月8日	KKRホテル	研究会設立趣意等を決定し役員を選出する	
メディアツアー	10月11日	八王子市・伊勢原市	一般紙を中心としたメディア参加による酪農生産現場の視察	
牛乳食育研修会	10月11、12日	仙台	牛乳モデル教材を用いた実践的研修	藤本勇二ほか
第4回理事会	10月18日	Jミルク会議室	平成24年度事業進捗状況及び今後の課題	
牛乳食育研修会	10月25、26日	岡山	牛乳モデル教材を用いた実践的研修	長島美保子ほか
第3回需給委員会	10月26日	Jミルク会議室	24年度第3四半期までの需給見通し(公表)について	
第1回生乳検査精度管理委員会	10月31日	Jミルク会議室	認証規定の改定案、案内パンフレット内容の協議	
牛乳食育研修会	11月8、9日	大阪	牛乳モデル教材を用いた実践的研修	田中博之ほか
第2回栄養士向け情報開発研究会	11月19日	Jミルク会議室	栄養士向けの情報開発・ツールの検討	
牛乳食育研修会	11月29、30日	福岡	牛乳モデル教材を用いた実践的研修	長島美保子ほか
第4回需給委員会	12月上旬	Jミルク会議室	24年度第4四半期までの需給見通し(公表)について	

上記は予定であり、日時・場所・講師等変更する場合があります。

## 編集後記

今回から、「Jミルクの外部連携組織である「乳の学術連合」所属会員の先生にそれぞれの分野から御意見をいただくことにしました。オリンピックの世界でもスポーツと栄養等、ますます科学的なアプローチの必要性が求められているのです。

Jミルクの調査活動について、「牛乳乳製品に関する食生活動向調査」の概要を紹介します。生活者の本質的なニーズの解明のため、食生活の構造的変化や牛乳乳製品に関する意識変化も捕捉していくものです。ホームページをリニューアルしていますので、少しご紹介しました。ぜひご覧あれ！ (T.I)